

第3回安城市新美南吉絵本大賞募集候補作品

目次

一、	赤いろうそく	1
二、	あし	3
三、	飴だま	5
四、	うまやの そばの なたね	7
五、	お母さんたち	11
六、	がちょうの たんじょうび	13
七、	かんざし	15
八、	木の祭り	17
九、	去年の木	19
十、	げたに ばける	21
十一、	仔牛	23
十二、	こぞうさんの おきょう	25
十三、	子どものすきな神さま	27
十四、	里の春、山の春	31
十五、	たけのこ	33
十六、	ついて いった ちようちよう	35
十七、	でんでんむし	37
十八、	でんでんむしの かなしみ	39
十九、	ぬすびとと こひつじ	41
二十、	花のき村と盗人たち	43
二一、	ひとつの火	45
二二、	ひよりげた	47
二三、	ひろった らっぱ	49
二四、	みちこさん	51

赤いろうそく

山から里の方へ遊びにいったさるが一本の赤いろうそくをひろいました。赤いろうそくはたくさんあるものではありません。それでさるは赤いろうそくを花火だと思いきんでしまいました。

さるはひろった赤いろうそくをだいに山へ持って帰りました。

山ではたいへんなさわぎになりました。何しろ花火などというものは、しかにしてもししにしてもうさぎにしても、かめにしても、いたちにしても、たぬきにしても、きつねにしても、まだ一度もみたことがありません。その花火をさるがひろってきたというのであります。

「ほう、すばらしい。」

「これは、すてきなものだ。」

しかやししやうさぎやかめやいたちやたぬきやきつねがおし合いへしあいして赤いろうそくをのぞきました。するとさるが、

「あぶないあぶない。そんなに近よってはいけない。爆発するから。」といいました。みんなはおどろいてしりごみしました。

そこでさるは花火というものが、どんなに大きな音をして飛び出すか、そしてどんなに美しく空にひろがるか、みんなに話して聞かせました。そんなに美しいものならみたいものだと思いました。

「それなら、今晚山のでっぺんにいってあそこで打ち上げてみよう。」とさるがいいました。みんなはたいへん喜びました。夜の空に星をふりまくようにばあつとひろがる花火を眼にかべてみんなはうっとりしました。

さて夜になりました。みんなは胸をおどらせて山のでっぺんにやっていますました。さるはもう赤いろうそくを木の枝にくくりつけてみんなのくるのを待っていました。

いよいよこれから花火を打ち上げることになりました。しかし困ったことができませんでした。と申しますのは、だれも花火に火をつけようとしなかったからです。みんな花火をみることはすきでしたが火をつけに行くことは、すきでなかったのであります。

これでは花火はあがりません。そこでくじをひいて、火をつけにゆくものをきめることになりました。第一にあたったものはかめであります。

かめは元気を出して花火の方へやっけていきました。だがうまく火をつけることができませんでした。いえ、いえ。かめは花火のそばまでくると首がしげんにひっこんでしまつて出てこなかったのであります。

そこでくじがまたひかれて、こんどはいたちがいくことになりました。いたちはかめよりはいくぶんましでした。というのは首をひっこめてしまわなかったからであります。しかしいたちはひどい近眼きんがんでありました。だからろうそくのまわりをきよきよるところについているばかりでありました。

とうとうししが飛び出しました。ししはまったく勇しいけだものでした。ししはほんとうにやっていって火をつけてしまいました。

みんなはびっくりして草むらに飛びこみ耳をかたくふさぎました。耳ばかりでなく眼めもふさいでしまいました。

しかしろうそくはぼんともいわずに静かにもえているばかりでした。

底本*「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者*新美南吉

出版社*大日本図書

出版年*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用*1999年3月25日第11刷発行

入力*安城市中央図書館職員

二ひきの馬が、まどのところでぐうるぐうるとひるねをしていました。すると、すずしい風がでてきたので、一ぴきがくしゃめをしてめをさしました。ところが、あとあしがいっぼんしびれていたのです、よろよろとよろけてしまいました。た。

「おやおや。」

そのあしに力をいれようとしても、さっぱりはいりません。

そこでともだちの馬をゆりおこしました。

「たいへんだ、あとあしをいっぼん、だれかにぬすまれてしまった。」

「だって、ちゃんといっぼんじゃないか。」

「いやこれはちがう。だれかのあしだ。」

「どうして。」

「ぼくの思うままに歩かないもの。ちよつとこのあしをけとばしてくれ。」

そこで、ともだちの馬は、ひづめでそのあしをぽおんとけとばしました。

「やっぱりこれはぼくのじゃない、いたくないもの。ぼくのあしならいたはずだ。」

よし、はやく、ぬすまれたあしをみつけてこよう。」

そこで、その馬はよろよろと歩いてゆきました。

「やア、椅子がある。椅子がぼくのあしをぬすんだのかもしれない。よし、けとばしてやろう、ぼくのあしならいたはずだ。」

馬はかたあしで、椅子のあしをけとばしました。

椅子は、いたいても、なんともいわないで、こわれてしまいました。

馬は、テーブルのあしや、ベッドのあしを、ぼんぼんけつてまわりました。けれど、どれもいたいといわなくて、こわれてしまいました。

いくらさがしてもぬすまれたあしはありません。

「ひよつとしたら、あいつがとつたのかもしれない。」

と馬は思いました。

そこで、馬はともだちの馬のところへかえってきました。そして、すきを見て、ともだちのあとあしをぽおんとけとばしました。

するとともだちは、

「いたいッ。」

ときけんとびあがりしました。

「そオらみる、それがぼくのあしだ。きみだろう、ぬすんだのは。」

「このとんまめが。」

ともだちの馬は力いっぱいけかえました。

しびれがもうなおっていたので、その馬も、

「いたいッ。」

と、とびあがりました。

そして、やつのことで、じぶんのあしはぬすまれたのではなく、しびれていたのだとわかりました。

底本*「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者*新美南吉

出版社*大日本図書

出版年*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用*1999年3月25日第11刷発行

入力*安城市中央図書館職員

飴あめ
だ
ま

春のあたたかい日のこと、わたし舟ぶねにふたりの小さな子どもをつれた女の旅人がのりました。

舟が出ようとする、

「おおい、ちよつとまってくれ。」

と、どての向こうから手をふりながら、さむらいがひとり走ってきて、舟にとびこみました。

舟は出ました。

さむらいは舟のまん中にどっかりすわっていました。ぽかぽかあたたかいので、そのうちにいねむりをはじめました。

黒いひげをはやして、つよそうなさむらいが、こつくりこつくりするので、子どもたちはおかしくて、ふふふと笑いました。

お母さんは口に指をあてて、

「だまっておいで。」

といました。さむらいがおこってはたいへんだからです。

子どもたちはだまりました。

しばらくするとひとりの子どもが、

「かあちゃん、飴あめだまちょうだい。」

と手をさしました。

すると、もうひとりの子どもも、

「かあちゃん、あたしにも。」

といました。

お母さんはふところから、紙のふくろをとりだしました。ところが、飴あめだまはもう一つしかありませんでした。

「あたしにちょうだい。」

「あたしにちょうだい。」

ふたりの子どもは、りようほうからせがみました。飴あめだまは一つしかないのです、お母さんはこまってしまいました。

「いい子たちだから待っておいで、向こうへついたら買ってあげるからね。」

といっせきかせても、子どもたちは、ちょうだいよオ、ちょうだいよオ、とだだをこねました。

いねむりをしていたはずのさむらいは、ぱっちり眼をあけて、子どもたちがせがむのをみていました。

お母さんはおどろきました。いねむりをじやまされたので、このおさむらいはおこっているのにちがいない、と思いました。

「おとなしくしておいで。」

と、お母さんは子どもたちをなだめました。

けれど子どもたちはききませんでした。

するとさむらいが、すらりと刀をぬいて、お母さんと子どもたちのまえにやってきました。

お母さんはまっさおになって、子どもたちをかばいました。いねむりのじやまをした子どもたちを、さむらいがきりころすと思ったのです。

「飴^{あめ}だまを出せ。」

とさむらいはいいました。

お母さんはおそるおそる飴だまをさしました。

さむらいはそれを舟^{ふね}のへりにのせ、刀でぱちんと二つにわかりました。

そして、

「そおれ。」

とふたりの子どもにわけてやりました。

それから、またもとのところにかえって、こっくりこっくりねむりはじめました。

底本*「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者*新美南吉

出版社*大日本図書

出版年*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用*1999年3月25日第11刷発行

入力*安城市中央図書館職員

うまやの そばの なたね

うまやの まどの そとに なたねが はえて おりました。

まだ 花は さいて おりません。けれど つぼみが たくさん ついて おりました。

もう じき はるが くるのです。うまやの まえの ひざしが ひに ひに あたたかく なって くらい 土から 白い ゆげが のぼりはじめて います。

なたねの つぼみたちは かんばしい においの なかで だんだん ふくらん で いきます。

「もう じき、ね」と 一つの つぼみが ささやきます。

「ええ、もう すぐ、おんもが みられます」と ほかの つぼみが こたえます。

つぼみたちは まだ この せかいを みた ことが ありません。この せかいは じびたと そらの 二つに わかれて いて、その あいだに、にんげんと いう りこうなもの が いくて いると いう ことも、ことりと いう やさしい いきもの いると いう ことも、また つぼみたちじしんが、花と いう

うつくしい ものに なるのだと いう ことも して いません。それで、

「おんもは どんな ところでしょう」

と どの つぼみも おもって いるので ありました。

その とき むこうの むぎばたけから ことしに なってから はじめての ひばりが そらに まいあがりました。そして ひばりは すがたが みえなく なるほど たかくのぼった とき うつくしい こえで うたいはじめました。

「ぴいちく ぴいちく ぴいちく ぴいちく」

ひばりの こえは たかい そらから きんの あめのように ふつて きて、うまやのそばの なたねの まわりに ふりそそぎました。

「なんと いう きれいな こえでしょう」

「あんなに よい こえで うたう ことの できるのは たれでしょう」

と なたねの つぼみたちは うつとりして ささやきあいました。

すると、つぼみたちの あたまの うえで だれかが、

「ひばりです、よ」と ふとい こえで いいました。

つぼみたちは びっくりして、だまって しまいました。やがて おどろきが とまると、

「いまの ふとい こえは だれでしょう」

「きつと おそろしい ものに ちがいないね」

と ひそひそ いいあいました。

すると また さつきの ふとい こえで、

「わたしは うまです、ちつとも おそろしい ものじゃありません」

と いいました。しかし つぼみたちは うまが どんな もので あるかも しつて いま
せん。

やわらかな けむりのような はるの あめが 二三日 ふりつづきました。あめが やむ
と まえよりも いっそう あたたかな ひの ひかりが そそぎました。

そこで とうとう いちばん いただきに いた つぼみが おめめを ひらいて 花に
なりました。それから つぎつぎに つぼみたちは 上の 方から 下の 方へ ひらいて
いきました。

「おお まぶしい」

と どの つぼみも はじめは さげびました。それは はじめて みる せかい が いま
までと ちがって ぴかぴか ひかかって いたからで あります。

やがて つよい ひかりに なれて くと なたねの 花たちは あたりを みまわして、
木や はたけや みちや いえや そらや みずを みました。それは

たいへん うつくしく みえたので 花たちは このような せかいに うまれて
きた ことを よろこびあいました。それから 花たちは じぶんたちの すがた を なが
めあい、じぶんたちから ながれでる においをば かぎあって、じぶんたちが みな おな
じように きいろい きものを きて おり、ほかの 木や くさに まけないほど うつく
しいのを しつて いっそう よろこびあいました。

その とき 花たちの あたまの 上で、

「おや まあ きれいに さきましたね」

と いう こえが しました。花たちは きいた ことの ある こえだと おもつて みる
と、うまの まどに 大きな やさしい うまの かおが のぞいて おりました。こんな
に やさしい ものが 花たちの おそろしく おもった うまだったのです。

「おうまの おばさん、この せかいは なんと いう うつくしい よい ところでしょう」
と 花の ひとつが いいました。

「ほんとうに そうですよ、わたしも はやく ぼうやに この よい せかいを
みせて やりたくて たまりません」

と うまは こたえました。

「おや、おばさん、あかんぼが うまれるのですか」

「もう うまれて おります。でも まだ おめめを とじて ねねして いるのですよ」

花たちは うまの あかんぼを みたいと おもいました。けれど あんなに まどが たかくて、どうして なかを のぞく ことが できましょう。

「おや みなさん」

と その とき うまの おばさんが いいました。

「まだ ひらかない つぼみが あるじゃ ありませんか」

花たちは びっくりして みまわしました。

「どれ どこに」

「そら、そら、そこに」

なるほど、みると なたねの みきに まだ ひらかない つぼみが ひとつのこつて おりました。

「どう したのでしょう」

「まだ ねんねしてるのかしら」

「わたしたちが もう おめめを ひらいた ことを しらないのかしら」

「もう はるが きてるのを しらないのかしら」

そこで 花たちは まだ ひらかない つぼみを おこしに かかりました。

「まだ ひらかない つぼみさん もう はるですよ、おんもに でて いらっしやい」

「まだ ねんねしてる つぼみさん おめめを さましなさい」

すると つぼみが こたえました。

「わたしは もう めを さまして います」

「あら あら、それでは すぐ でて いらっしやい」

やがて その つぼみが ふたつに われて なかから なにか でて まいりました。ところが、花たちの おどろいた ことには それは 花たちのように きいろい きものかわりに まっしろい きものを きて おりました。

「あら どう したのでしょう、あなたの おべへは まっしろよ」

と おどろいた 花の ひとつが いいました。

すると その とき まどから みて いた おうまの おばさんが、

「ちようちようですよ」

と 花たちに しらせました。

それは ほんとに いっぴきの ちようちようで ありました。ちようちようは

花とは ちがいます、おはねが あって あちら こちら とびまわる ことが できます。

さて この ちようちようも おはねが じょうぶに なると かせに のつて うまやの やねを こえたり、おがわの うえに いったり したり しました。

けれど　なたねの　つぼみと　いっしよに　そだった　ちようちようですから、なたねの花
たちとは　たいへん　なかよしでした。

「ちようちようさん」

と　とぶ　ことの　できない　花たちは　いうのでした。「おうまの　あかちゃんは
もう　おめめを　あいたか　みて　きて　ちようだい」

ちようちようは　すぐ　うまやの　まどから　なかに　はいつて　いきました。

「おうまの　おばさん　こんにちは」

「おや　ちようちようさん　こんにちは」

「あかちゃんの　おめめは　あきましたか」

「けさ　やつと　あきました」

みると　おうまの　あかんぼは　ねわらの　なかで　ぱっちり　おめめを　あけて　おと
なく　して　いました。

底本＊「新美南吉童話集　1　ごん狐」

著者＊新美南吉

出版社＊大日本図書

出版年＊1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用＊1996年9月1日第10刷発行

入力＊安城市中央図書館職員

お母さんたち

お母さんになった小鳥が木の上の巢すの中で卵たまごをあたたためておりました。するとまたきょうも牝牛めうしがその下へやってきました。

「小鳥さん、こんにちは。」と牝牛がいました。

「まだ卵はかえりませんか。」

「まだかえりません。」と小鳥は答えていました。

「あなたの赤ちゃんはまだですか。」

「だんだんお腹なかの中で大きくなってまいります。もう十日もしたら生まれましょう。」と牝牛はいいました。

それから小鳥と牝牛はいつものようにまだ生まれていない自分たちの赤ん坊あかぼのことで、じまんをしあいました。

「牝牛さん、聞いてください。私わたしのかわいい坊ぼうやたちはね、きっと美しい瑠璃色るりいろをしていて、ばらの花みたいにおいがしますよ。そして鈴すずをふるようなよい声でちるちると歌いますよ。」

「私の坊やはね、ひづめが二つにわれていて、毛色はぶちでしっぽもちゃんについて、私をよぶときは、もうもうつかあいい声でよびますよ。」

「あらおかしい。」と小鳥は笑いをおさえていました。

「もうもうがかあいい声ですって。それにしっぽなんかよけいなものよ。」

「何をおっしゃるのですか。」と牝牛も負けずにいいました。

「しっぽがよけいなものなら、くちばしなんかもよけいなものよ。」

こんなふうに話をしていたら、おしまいはけんかになってしまいましたよ。ところがけんかにならない前に、一ぴきのかえるが水の中からびよんととび出してきました。

「何をそんなに一生けんめいに話していらっしやるのですか。」と緑色のかえるは聞きました。そして、牝牛と小鳥からそのわけを聞くと、かえるは眼めをまんまるくして、「それはたいへんよ。」といいました。何がたいへんなのか牝牛めうしと小鳥が心配そうにきくと、かえるはいいました。

「あなた方は赤ちゃんがもうじき生まれるというのに、子守歌をならいもしないで、そんなのきなことをいつていらっしやる。」

牝牛と小鳥は、どうしてこんなにうっかりしていたのでしょうか。さっそく子守歌をならわなければなりません。ところでだれにならったものでしょう。

「じゃあ、私が教えてあげます。」とかえるがいいました。牝牛と小鳥はたいへん喜んで、かえるに子守歌を教えてもらいました。

けれども、こんなにむずかしい子守歌はありません。とてもむずかしくて牝牛と小鳥はちっともおぼえられませんでした。それはこういう子守歌でした。

げっ げっ げっ

げろ げろ げっ

ぎやろ ぎやろ

げろ げろ

ぎやろ げろ げっ

牝牛と小鳥は、一生けんめいになりましたが、それでもおぼえられないのでおしまいにはいやになってしまいました。けれどかえるが、「子守歌を知らないでどうして赤ん坊が育てられましたよ。」といいますので、また元気を出して、「げっ げっ げっ」とならうのでした。そしてそれは夕方、風がすずしくなるころまでつづきました。

底本 * 『新美南吉童話集 1 ごん狐〔新装版〕』

著者 * 新美南吉

出版社 * 大日本図書

出版年 * 二〇一二年十二月一日 第一刷発行

入力に使用 * 二〇一二年十二月一日 第一刷発行

入力 * 安城市図書館情報館職員

がちょうの たんじょうび

ある おひやくしょうやの うらにわに あひるや、がちょうや、もるもつとや、うさぎや、いたちなどが すんで おりました。

さて、ある ひの こと がちょうの たんじょうびと いうので、みんなは がちょうの ところへ ごちそうに まねかれて いきました。

これで、いたちさえ よんで くれれば、みんな おきやくが そろう わけですが、さて、いたちは どう しましょう。

みんなは いたちは けっして わるものではない ことを して おりました。けれど、いたちには たった ひとつ、よく ない くせが ありました。それは おおぜいの まえでは、いう ことが できないような くせで ありました。なにかと もうしますと、ほかでも ありません、おおきな はげしい おならをする ことで あります。

しかし、いたちだけを よばないと いたちは きつと おこるに ちがい ありません。

そこで、うさぎが いたちの ところへ つかいに やって いきました。

「きょうは がちょうさんの たんじょうびですから おでかけ ください」

「あ、そうですか」

「ところで、いたちさん、ひとつ おねがいがあるのですが」

「なんですか」

「あの、すみませんが、きょうだけは おならを しないで ください」

「いたちは はずかしくて、かおを まっかに しました。そして、

「ええ、けっして しません」

と ことえました。

そこで いたちは やって いきました。

いろいろな ごちそうが でした。おからや、にんじんの しっぽや、うりのかわや、おぞうすいや。

みんなは たらふく たべました。いたちも ごちそうに なりました。

みんなは いい ぐあいだと おもって いました。いたちが おならを しなかつたからで あります。

しかし、とうとう、たいへんな ことが おこりました。いたちが とつぜん ひっくりかえって、きぜつして しまったのです。

さあ、たいへん。さつそく、もるもつとの おいしやが、いたちの ほんほこに
ふくれた おなかを しんさつしました。

「みなさん」と もるもつとは、しんばいそうに して いる みんなの かおを
みまわして いました。「これは、いたちさんが、おならを したいのを あまり
がまんして いたので こんな ことになつたのです。これを なおすには、いた
ちさんに おもいきり おならを させるより しかたは ありません」

やれやれ。みんなの ものは ためいきを して かおを みあわせました。そし
て やっぱり いたちは よぶんじゃ なかつたと おもいました。

底本 * 『新美南吉童話集 1 ごん狐〔新装版〕』

著者 * 新美南吉

出版社 * 大日本図書

出版年 * 二〇一二年十二月一日 第一刷発行

入力に使用 * 二〇一二年十二月一日 第一刷発行

入力 * 安城市図書館情報館職員

かんざし

おんなの こが いけの ふちから みずの なかを のぞいて おりました。
みずの なかには いっぱきの さかなが しずんで おりました。

「あっ」

と おんなの こが さげびました。かんざしが おんなの この あたまから
ぬけて、いけの なかに おちたからで あります。

かんざしは さかなの そばに しずんで きました。

「さかなさん、かんざしを ひろって ください」

と おんなの こが さかなに たのみました。

「これは なんですか」

と さかなは ききました。

「それは かんざしと 行って、あたまに さすものです」

と おんなの こは おしえて やりました。

「だいじな 物ですか」

「ええ、わたしには だいじな 物です」

そこで、さかなは よくが できました。かんざしを じぶんの ものに したいとおもいま
した。

「わたしは ひろって あげません。じぶんで おひろいなさい」

おんなの こは こまつて しまいました。みずは ふかいので とても じぶんで ひ
ろう ことは できません。おんなの こは なきながら 行って しまいました。

さかなは たいへん とくを したと おもいました。

「ひとつ あたまに さして みよう」

と 行って、かんざしを さして みました。そして、その とき、じぶんの あたまには か
んざしは させない ことが はじめて わかりました。

そして また、ほかの ひとには とうとい もので あつても、じぶんには
ちつとも とうとくない ことも あるのだ、と いう ことが わかりました。

つぎの ひ おんなの こは また いけの ふちに やって きました。

さかなは かんざしを くわえて みずの うえに うかびました。

「わたしが わるう ございました。さあ かんざしを おかえしします」

おんなの こは どんなに よろこんだ ことでしょう。なんども なんども
おれいを いました。

底本*「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者*新美南吉

出版社*大日本図書

出版年*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用*1996年9月1日第10刷発行

入力*安城市中央図書館職員

木の祭り

木に白い美しい花がいっぱい咲きました。木は自分のすがたがこんなに美しくなったので、うれしくてたまりません。けれどだれひとり、「美しいなあ」とほめてくれるものがないのでつまらないと思いました。木はめったに人のとおらない緑の野原のまんなかにぼつんと立っていたのであります。

やわらかな風が木のすぐそばをとおって流れていきました。その風に木の花のにおいがふんわりのおいてきました。においは小川をわたって麦畑をこえて、崖がけつぶちをすべりおりて流れていきました。そしてとうとうちようちようがたくさんいるじゃがいも畑まで、流れてきました。

「おや」とじゃがいもの葉の上にとまっていた一ぴきのちようが鼻をうごかしていました。

「なんてよいにおいでしよう、ああうっとりしてしまおう。」

「どこかで花がさいたのですね。」と、別の葉にとまっていたちようがいました。

「きつと原っぱのまんなかのあの木に花がさいたのですよ。」

それからつぎつぎと、じゃがいも畑にいたちようちようは風につてきたころよいにおいに気がついて、「おや」「おや」といったのであります。

ちようちようは花のにおいがとてもすきでしたので、こんなによいにおいがしてくるのに、それをうつつやっておくわけにはまいりません。そこでちようちようたちはみんなですうだんをして、木のところへやっっていくことにきめました。そして木のためにみんなで祭りをしてあげようということになりました。

そこではねにもようのあるいちばん大きなちようちようを先にして、白いのや黄色いのや、かれた木の葉みたいなのや、小さな小さなしじみみたいなのや、いろいろなちようちようがにおいの流れてくる方へひらひらと飛んでいきました。崖がけつぶちをのぼって麦畑をこえて、小川をわたって飛んでいきました。

ところが中でいちばん小さかったしじみちようははねがあまりつよくなかったので、小川のふちで休まなければなりません。しじみちようが小川のふちの水草の葉にとまってやすんでいますと、となりの葉のうらにみたことのない虫が一ぴきうつらうつらしていることがつきました。

「あなたはだあれ。」としじみちようがききました。

「ほたるです。」とその虫は眼めをさまして答えました。

「原っぱのまんなかの木さんのところでお祭りがありますよ。あなたもいらっしやい。」としじみちようがさそいました。ほたるが、

「でも、私は夜の虫だから、みんなが仲間にしてくれないでしょう。」といいました。しじみちようは、

「そんなことはありません。」といって、いろいろにすすめて、とうとうほたるをつれていきました。

なんて楽しいお祭りでしょう。ちようちようたちは木のまわりを大きなぼたん雪のようにとびまわって、つかれると白い花にとまり、おいしい蜜をお腹いっぱいごちそうになるのであります。けれど光がうすくなって夕方になってしまいました。みんなは、

「もっと遊んでいたい。だけでもうじきまつ暗になるから。」とためいきをつきました。するとほたるは小川のふちへとんでいって、自分の仲間をどっさりつれてきました。一つ一つのほたるが一つ一つの花の中にとまりました。まるで小さいちようちんが木にいっぱいともされたようなくあいでした。そこでちようちようたちはたいへんよろこんで夜おそくまで遊びました。

底本*「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者*新美南吉

出版社*大日本図書

出版年*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用*1996年9月1日第10刷発行

入力*安城市中央図書館職員

去年の木

いっぽんの木と、いちわの小鳥とはたいへんなかよしでした。小鳥はいちんちその木の枝えだで歌をうたい、木はいちんちじゆう小鳥の歌をきいていました。

けれど寒い冬がちがづいてきたので、小鳥は木からわかれてゆかねばなりませんでした。

「さよなら。また来年きて、歌をきかせてください。」
と木はいました。

「え。それまで待っててね。」

と、小鳥はいつて、南の方へとんでゆきました。

春がめぐってきました。野や森から、雪がきえていきました。

小鳥は、なかよしの去年の木のところへまたかえっていきました。

ところが、これはどうしたことでしょう。木はそこにありませんでした。根っこだけがのこっていました。

「ここに立ってた木は、どこへいったの。」

と小鳥は根っこにききました。

根っこは、

「きこりが斧おのでうちたおして、谷のほうへもっていつちやったよ。」
といました。

小鳥はたにのほうへとんでいきました。

谷の底には大きな工場があって、木をきる音が、びんびん、とっていました。

小鳥は工場の上にとまって、

「門さん、わたしのなかよしの木は、どうなったか知りませんか。」
とききました。

門は、

「木なら、工場の中でこまかくきりきざまれて、マッチになってあっちの村へ売られていったよ。」
といました。

小鳥はむらのほうへとんでいきました。

ランプのそばに女の子がいました。

そこで小鳥は、

「もしもし、マッチをごぞんじありませんか。」
とききました。

すると女の子は、

「マッチはもえてしまいました。けれどマッチのともした火が、まだこのランプにともっていません。」

といました。

小鳥はランプの火をじっとみつめておりました。

それから、去年の歌をうたって火にきかせてやりました。火はゆらゆらとゆらめいて、ころからよろこんでいるようにみえました。

歌をうたってしまうと、小鳥はまたじっとランプの火をみていました。それから、どこかへとんでいってしまいました。

底本*「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者*新美南吉

出版社*大日本図書

出版年*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用*1996年9月1日第10刷発行

入力*安城市中央図書館職員

げたに ばける

むらが ありました。むらの そとを おがわが ながれて いました。かわの きしには はんのきが しげって いました。

はんのきの したで おかあさんの たぬきが こどもの たぬきに ばける ことを おしえて いました。

「おてらの こぞうさんに ばける ときは ころもを つけて でのだよ。おきむらいに ばける ときは まげを つけて、 ひげを はやして、かたなを おこしに さしてね。」

「それでは、おてらの こぞうさんに ばけて みよっと」

こどもの たぬきは こぞうさんに ばけて みました。けれども、たいへんなことに、こぞうさんが ぴんと ひげを はやして いました。

「だめだよ。おひげなんぞ つけたり して。それは おきむらいに ばける ときだよ」

おかあさんの たぬきは がっかりして いました。

そんな ぐあいだ こどもの たぬきは なかなか うまく ばける ことは できませんでした。それでも、どうした ことか、げたに ばける ことだけは たいへん うまい もので ありました。

そこで こどもの たぬきは げたに ばけました。そして はんのきの したに ころがつて いました。

すると むこうから ひとりの さむらいが やって きました。さむらいは げたの おを きって こまっつて いる ところでしたので、

「や これは うまいわい、ここに げたが おちて いる」と いうて、こどもだぬきの ばけた げたを はきました。

きの かげから この ようすを うかがって いた おかあさんだぬきは たいへんな ことになったと、めを まんまるくして おどろきました。

さむらいは すたこら あるいて いきました。

こどもだぬきは、いまにも つぶれそうで、おもわず、

「ぐっ ぐっ」

と こえを だしました。さむらいは びっくりして あしもとを みると、げたの うしろに ふでの ほのような しっほが ちよろりと でて いきました。

けれど さむらいは かまわず どんどん あるいて いきました。

「ぐっぐっぐっ、かあちゃん」

こどもだぬきは たまらず とうとう おおきな こえを だして なきだしました。

おかあさんだぬきは しんぱいして、きの かげを かくれて さむらいの あとを ついて いくのです。

その うちに さむらいは むらにはいって いきました。

むらには げたやが ありました。

さむらいは げたを かって、こどもだぬきの ばけた げたを おもてに だして やり、おあしを ひとつ やって、

「や、ごくろうだったのう」と いました。

こどもだぬきは おあしを もらったので さっきの くるしさも わすれて、よろこび いさんで かえって いきました。

底本*「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者*新美南吉

出版社*大日本図書

出版年*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用*1999年3月25日第11刷発行

入力*安城市中央図書館職員

仔牛こ牛

仔牛がある日 お父さん牛とお母さん牛のところへ 行って、

「父ちゃん 母ちゃん、あたい 体のからだ 中が むじゅむじゅすんの。」と いいました。お父さん牛も お母さん牛も すっかり よろこんで よだれを たらしめました。そして お母さん牛が いいました。

「坊やぼう その むずむずするのはね、いまに 坊やの 体から 何かが はえて くるのよ、さあ それでは、あの 丘おかの 南の なの花畑の 中 にはいつて、じつとすわって いなさ い、何か はえて くるまで 待って いなさいね。」と いいきかせて、仔牛を ひとりきり 送って やりました。

仔牛が 行って しまおうと お母さん牛は むねを おどらせながら お父さん牛に いいました。

「ね、あの 仔こは 世界中で いちばん 美しい 仔牛だから、いまに きっと 肩かたの 下 から いつか ほら 丘おかの ふもとで 池の 上に うかんでた あの 白鳥はくちょうのような 美しい 白い 羽はねが 二つ はえますよ。」けれど お父さん牛は 大きな 顔を 横に ふりました。

「なにを ばかな。けものに 羽など はえるもんか。けものに はえる ものは 角つに しまってる。だが あれは、なかなか 勇ましい やつだ。だから きっと 鹿しかの 角みたいに りっぱな、枝えだの ある 角が できるだろう。」

「おお いやだ、あんな みつともない もの。あんな いやな ものが あの かわいい 仔にはえる ものですか。きっと 羽が はえます。もし あの 仔に 羽が はえないなら わたし、この しっぱを あげても よろしいわ。」

「そんな へんてこな しっぱなんか いらないよ、縄なわつきれの 方が よっぱど ました。お前が そう いうなら わしは こう いう。もし あれに 鹿の 角がはえないなら、わしは わしの ひづめを やろう。」すると お母さん牛は 大きな 顔を できるだけ しかめて、

「そんな ひづめより 道ばたに おっこって いる お腕わんの かけらの 方が ますですわ。」と いいました。

丘おかの 南の なたね畑の 中で じつと まって いた 仔牛こ牛の 頭に、やがて 小ちやく はえて きたのは、白鳥はくちょうの 羽はねでも なく、鹿しかの 角つでも なく、ふつうの 牛の まるい 角でした。仔牛が お父さん牛と お母さん牛の ところへ かえって くと ふたりの 親牛は 眼めを しばたいて よろこびました。そして いいあいました。

「まあ、よかった。でもなんてりっぱな牛になったことだろう。」

底本＊「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者＊新美南吉

出版社＊大日本図書

出版年＊1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用＊1996年9月1日第10刷発行

入力＊安城市中央図書館職員

こぞうさんの おきよう

やまでの おしょうさんが びょうきに なりましたので、かわりに こぞうさんが だんかへ おきようを よみに いきました。

おきようを わすれないように、こぞうさんは みちみち よんで いきました。

キミヨ

ムリヨ

ジュノ

ライ

すると なたねばたけの なかに うさぎが いて、

「こぼうず あおぼうず。」

と よびました。

「なんだい。」

「あそんで おいきよ。」

そこで、こぞうさんは うさぎと あそびました。しばらく すると、

「やっ しまった。おきようを わすれちゃった。」

と こぞうさんが さけびました。

すると うさぎは、

「そんなら おきようの かわりに、

むこうの ほそみち

ぼたんが さいた

と おうたいよ。」

と おしえました。

こぞうさんは だんかへ いきました。そして、うさぎの おしえて くれたように、ほと

けさまの まえで、

むこうの ほそみち

ぼたんが さいた

さいた さいた

ぼたんが さいた

と かわいい こえで うたいました。

きいて いた ひとびとは びっくり して 目を ぱちくり させました。それから ぐ

すくす わらいました。こんな かわいい おきようは きいた ことが ありません。

そこで、ごほうじが すむと、だんかの ごしゅじんは すました かおで、
「はい、ごくろうさま。」

と、おまんじゅうを こぞうさんに あげました。

「ちそうさま。」

と こぞうさんは おまんじゅうを いただいて たもとに いれました。

こぞうさんは、かえりに その おまんじゅうを、さっきの うさぎに わけて やる こと
とを わすれませんでした。

底本＊「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者＊新美南吉

出版社＊大日本図書

出版年＊1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用＊1996年9月1日第10刷発行

入力＊安城市中央図書館職員

子どものすきな神さま

子どものすきな小さい神さまがありました。いつもは森の中で、歌をうたったり笛をふいたりして、小鳥やけものと遊んでいましたが、ときどき人のすんでいる村へ出てきて、すきな子どもたちと遊ぶのでした。

けれどこの神さまは、いちどもすがたをみせたことがないので、子どもたちにはちつともわかりませんでした。

雪がどっさりふったつぎの朝、子どもたちはまっしろな野っばらで遊んでいました。するとひとりの子どもが、

「雪の上に顔をうつそうよ。」
といました。

そこで十三人の子どもたちは、腰をかがめてまるい顔をまっしろな雪におしあてました。そうすると、子どもたちのまるい顔は、一列にならんで雪の上につつたのでした。

「一、二、三、四、……」

とひとりの子どもが顔のあとをかぞえてみました。

どうしたことでしょう。十四ありました。子どもは十三人しかいないのに、顔のあとが十四あるわけがありません。

きつと、いつものみえない神さまが、子どもたちのそばにきているのです。そして神さまも、子どもたちといっしょに顔を雪の上につつしたのちにちがいありません。

いたずらさずきの子どもたちは、顔をみあわせながら、目と目で、神さまをつかまえようよ、とそうだんしました。

「兵隊ごっこしよう。」

「しようよ、しようよ。」

そうして、いちばんつよい子が大将になり、あとの十二人が兵隊になって、一列にならびました。

「きをつけッ。ばんごうッ。」

と大将がこうれいをかけました。

「一ッ。」

「二ッ。」

「三ッ。」

「四ッ。」

「五ッ。」

「六ッ。」

「七ッ。」

「八ッ。」

「九ッ。」

「十ッ。」

「十一ッ。」

「十二ッ。」

と十二人の兵隊がばんごうをいってしまいました。そのとき、だれのすがたもみえないのに、十二番目の子どものつぎで、

「十三ッ。」

といったものがありました。玉をころがすようなよい声でした。その声をきくと子どもたちは、

「それ、そこだッ。神さまをつかまえろッ。」

といって、十二番目の子どものよこをとりまきました。

神さまはめんくらいました。いたずらな子どものことだから、つかまったらどんなめにあうかしれません。

ひとりのせいたかのつぼの子どもまたの下をくぐって、神さまは森へにげかえりました。けれど、あまりあわてたので靴をかたほう落としてきてしまいました。子どもたちは雪の上から、まだあたたかい小さな赤い靴をひろいました。

「神さまはこんな小さな靴をはいてたんだね。」

といってみんなで笑いました。

そのことがあってから、神さまはもうめつたに森から出てこなくなりました。それでもやはり子どもがすきなものだから、子どもたちが森へ遊びにゆくと、森のおくら、

「おおい、おおい。」

とよびかけたりします。

出版社*大日本図書

出版年*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用*1999年3月25日第11刷発行

入力*安城市中央図書館職員

里の春、山の春

野原にはもう春がきていました。

桜がさき、小鳥はないておりました。

けれども、山にはまだ春はきていませんでした。

山のいただきには、雪も白くのことっていました。

山のおくには、おやこの鹿がすんでいました。

坊やの鹿は、生まれてまだ一年にならないので、春とはどんなものか知りませんでした。

「お父ちゃん、春ってどんなもの。」

「春には花がさくのか。」

「お母ちゃん、花ってどんなもの。」

「花ってね、きれいなものよ。」

「ふうん。」

けれど、坊やの鹿は、花をみたこともないので、花とはどんなものか、春とはどんなものか、よくわかりませんでした。

ある日、坊やの鹿はひとり山の中を遊んで歩きまわりました。

すると、とおくのほうから、

「ぼおん。」

とやわらかな音が聞こえてきました。

「なんの音だろう。」

するとまた、

「ぼおん。」

坊やの鹿は、ぴんと耳をたててきていました。やがて、その音にさそわれて、どんどん山をおりてゆきました。

山の下には野原がひろがっていました。野原には桜の花がさいいて、よいかがおりがしていました。

いっぼんの桜の木の根かたに、やさしいおじいさんがいました。

仔鹿をみるとおじいさんは、桜をひとえだ折って、その小さい角にむすびつけてやりました。

「さア、かんざしをあげたから、日のくれないうちに山へおかえり。」

仔鹿はよろこんで山にかえりました。

坊^ぼやの鹿からはなしをきくと、お父さん鹿とお母さん鹿は口をそろえて、
「ぼんという音はお寺のかねだよ。」

「おまえの角についているのが花だよ。」

「その花がいつぱいさいていて、きもちのよいにおいのしていたところが、春だったのさ。」

とおしえてやりました。

それからしばらくすると、山のおくへも春がやってきて、いろいろな花はさきはじめました。

底本 * 『新美南吉童話集 1 ごん狐〔新装版〕』

著者 * 新美南吉

出版社 * 大日本図書

出版年 * 二〇一二年十二月一日 第一刷発行

入力に使用 * 二〇一二年十二月一日 第一刷発行

入力 * 安城市図書館職員

たけのこ

たけのこは はじめ じびたの したに いて、あっち こっちへ くぐって いくもので あります。

そして、あめが ふった あとなどに ぼこぼこ つちから あたまを だすので あります。

さて、この おはなしは、まだ その たけのこが じびたの なかに いたときのことです。

たけのこたちは とおくへ いくたがって しょうが ないので、おかあさんの たけが、

「そんなに とおくへ いっちゃ いけないよ、やぶの そとに だと うまの あしに ふまれるから」

と しかって おりました。

しかし、いくら しかられても、ひとつの たけのこは どんどん とおくへもぐって いくので ありました。

「おまえは なぜ おかあさんの いう ことを きかないの」

と おかあさんの たけが ききました。

「あっちの ほうで うつくしい やさしい こえが わたしを よぶからです」
と その たけのこは こたえました。

「わたしたちには なんにも きこえやしない」

と ほかの たけのこたちは いいました。

「けれど、わたしには きこえます。それは もう なんとも いわれぬ よい ことです」

と その たけのこは いいました。

そして どんどん はなれて いきました。

とうとう この たけのこは ほかの たけのこたちと わかれて、かきねの そとに あたまを だして しまいました。

すると そこへ よこぶえを もった ひとが ちかよって きて、

「おや、おまえは まいごの たけのこだね」
と いいました。

「いえいえ、わたしは、あなたの ふいて いらっしやった、その ふえの こえが あんまり よかったので、こっちへ さそわれて きました」

と たけのこは こたえました。

さて、この たけのこは おおきく かたく なった とき、りっぱな よこぶえ
と なりました。

底本*「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者*新美南吉

出版社*大日本図書

出版年*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用*1999年3月25日第11刷発行

入力*安城市中央図書館職員

ついて いった ちようちよう

まちかどで ふうせんうりの じいさんが ふうせんを うって いました。あかや あおや きいろや むらさきや、いろいろな ふうせんだまは ほほを すりよせながら かぜの ふく ほうへ なびいて いました。

いっぴきの しろい ちようちようが ふうせんだまの ところへ まいにちとんで きて、いちんちじゅう あそんで いくのでした。

ちようちようは たくさんの ふうせんの うち、いちばん ちいさい あかい ふうせんだまと、たいへん なかよしでした。

ある ひ、あかんぼを せおった こもりが やって きて、いっせんで そのちいさい あかい ふうせんだまを かいました。

かわれて いく とき あかい ふうせんだまは いいました。

「ちようちようさん、さよなら」

けれど しろい ちようちようは いいました。

「いいえ、わたしは ついて いきます」

そして、ちようちようは ひらひらと あかい ふうせんだまに ついて いきました。

こもりは なみきみちを とおって、こうえんの ほうへ いきました。いとでつながれた ふうせんだまは こもりの あとから ついて いきました。そして

その あとから しろい ちようちようは ついて いきました。

こもりは こうえんへ くと、べんちに こしかけて こもりうたを うたいました。

「ねんねん よおおお

ねんねん よう」

しかし、あかんぼうより さきに、こもりの ほうが うつら うつら ねむりはじめました。

しろい ちようちようは しんぱいそうに、

「これから どこへ いくの」

と ふうせんに ききました。

ふうせんは、

「ぼく しらない」

と いいました。

そのとき、こもりは ふうせんの いとを はなして しまいました。あかい
ふうせんだまは そらの ほうへ のぼりはじめました。

しろい ちようちようも その あとに ついて のぼって いきました。

「ぼく どこへ いくんだか わからないから、ちようちようさん もう おかえり
よ」

と ふうせんだまは いいました。

「いいえ わたし ついて いきます」

と しろい ちようちようは いいました。

ふうせんだまと ちようちようは たかい たかい ところまで きましたので、
まちが つみぎざいくのように ちいさく みえました。

「ついて きちゃ だめだ。ぼくは どこへ いくのか わかんないよ」

と ふうせんだまは いいました。

けれど、しろい ちようちようは ついて いきました。

まもなく、あかい ふうせんだまと しろい ちようちようは みえなく なっ

て しまいました。

底本 * 『新美南吉童話集 1 ごん狐〔新装版〕』

著者 * 新美南吉

出版社 * 大日本図書

出版年 * 二〇一二年十二月一日 第一刷発行

入力に使用 * 二〇一二年十二月一日 第一刷発行

入力 * 安城市図書館情報館職員

でんでんむし

大きな でんでん虫の せなかに うまれたばかりの 小さな でんでん虫が のつて
ました。小さな 小さな すきとおるような でんでん虫でした。

「ぼうや ぼうや。もう、あさだから、めを だしなさい。」と、大きな でんでん虫が よび
ました。

「あめは ふって いないの？」

「ふって いないよ。」

「かぜは ふいて いないの？」

「ふいて いないよ。」

「ほんとう？」

「ほんとうよ。」

「そんなら。」と、ほそい めを、あたまの うえに そーっと だしました。

「ぼうやの あたまの ところに 大きな ものが あるでしょう？」と おかあさんが き
きました。

「うん、この めに しみる もの これ なあに。」

「みどりの はっぱよ。」

「はっぱ？ いきてんの。」

「そう、でも どうも しや しないから だいじょうぶ。」

「あ、かあちゃん、はっぱの さきに たまが ひかっている。」

「それは あさつゆって もの。きれいでしょう。」

「きれいだなあ、きれいだなあ、まんまるだなあ。」

すると、あさつゆは、はの さきから ぴよいと はなれて ぷつんと じべたへおちて し
まいました。

「かあちゃん、あさつゆが にげてっちゃった。」

「おっこつたのよ。」

「また はっぱの とこへ かえって くるの。」

「もう、きません。あさつゆは おっこちると こわれて しまうのよ。」

「ふーん、つまらないね、あ、しろい はっぱが とんで ゆく。」

「あれは はっぱじゃ ないこと、ちようちようよ。」

ちようちようは、きのはの あいだを くぐって そら たかく とんで いきました。ち
ようちようが みえなく になると、こどもの でんでん虫は、

「あれ、なあに。はっぱと はっぱの あいだに、とおく みえる もの。」と ききました。

「そらよ。」と かあさんの でんでん虫は こたえました。

「だれか、そらの なかに いるの？」

「さあ、それは かあさんも しりません。」

「そらの むこうに なにが あるの？」

「さあ、それも しりません。」

「ふーん。」小さい でんでん虫は、おかあさまでも わからない ふしぎな とおいそらを、ほそい めを 一ぱい のぼして いつまでも みて いました。

底本*「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者*新美南吉

出版社*大日本図書

出版年*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用*1996年9月1日第10刷発行

入力*安城市中央図書館職員

でんでんむしの かなしみ

いっぴきの でんでんむしが ありました。

ある ひ その でんでんむしは たいへんな ことに きが つきました。

「わたしは いままで うっかりして いたけれど、わたしの せなかの からの なかには かなしみが いっぱい つまって いるではないか」

この かなしみは どう したら よいでしょう。

でんでんむしは おともだちの でんでんむしの ところに やって いきました。

「わたしは もう いきて いられません」

と その でんでんむしは おともだちに いいました。

「なんですか」

と おともだちの でんでんむしは ききました。

「わたしは なんと いう ふしあわせな ものでしょうか。わたしの せなかの からの なかには かなしみが いっぱい つまって いるのです」

と はじめの でんでんむしが はなしました。

すると おともだちの でんでんむしは いいました。

「あなたばかりでは ありません。わたしの せなかにも かなしみは いっぱいで す。」

それじゃ しかたないと おもって、はじめの でんでんむしは、べつの おともだちの ところへ いきました。

すると その おともだちも いいました。

「あなたばかりじゃ ありません。わたしの せなかにも かなしみは いっぱいで す」

そこで、はじめの でんでんむしは また べつの おともだちの ところへ いきました。

こうして、おともだちを じゅんじゅんに たずねて いきましたが、どの ともだちも おなじ ことを いうので ありました。

とうとう はじめの でんでんむしは きが つきました。

「かなしみは だれでも もって いるのだ。わたしばかりでは ないのだ。わたしは わたしの かなしみを こらえて いかなきや ならない」

そして、この でんでんむしは もう、なげくのを やめたので あります。

底本＊「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者＊新美南吉

出版社＊大日本図書

出版年＊1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用＊1999年3月25日第11刷発行

入力＊安城市中央図書館職員

ぬすびとと こひつじ

やわらかい くさが みどりの もうふのように はえて いる ひろっばに た
くさんの ひつじが めいめいと なきながら あそんで いました。

すると そこへ ひとりの ぬすびとが とおりかかりました。おなかが すい
ている ぬすびとの めに、ふと まるまるした こひつじが 一びき、みんなと
はなれて あそんで いるのが うつりました。

「あの こひつじは うまそうだ。」

と いった、ぬすびとは その こひつじを こっそり ぬすんで ふとこころに
いれました。そして すたすたと もりの ほうへ 行って しまいました。

そこで、こひつじを ふとこころから とりだし、ぶちこころそうと おもって いし
ころを ふりあげました。けれど、こひつじは ころされるとは ちつとも しらず
に ぬすびとの かおを みあげて いるので、ぬすびとは きゆうに かわいそう
になりました。ふりあげて いた いしころを、ぼーんと むここの きに なげ
つけて、また こひつじを ふとこころに いれ、すいた おなかを おさえながら
一つの むらへ やって きました。

みずぐるまの まわって いる そばで ばんを もった ひとりの ひやくしよ
うに あったので、

「おい こひつじと ばんと とりかえっこしないかい。」と いうと、ひやくしよ
うは、

「いいとも、ほら、やきたての ばんを 五つ あげよう。」と いった せなかの
ふくろから ばんを だしました。そこで ぬすびとは ばんと こひつじと とり
かえっこしましたが、ひやくしよの てに ぶらさげられた こひつじが かわい
そうに なったので、とりかえっこを やめて しまいました。

そして また ふとこころに こひつじを いれて、

「しかたが ないから、この こひつじは おれが そだてて やろう。」と ひとり
ごとを いいながら やって ゆくうち とつぷり ひが くれました。こひつじ
は おかあさんの おちちが こいしく なって きて、

「めい めい、おかあちゃん おかあちゃん おちち のみたい。」と なきました。

「こまった やつだな、おれには おちちが でないから やつぱり もとの まき
ばへ つれてって やろう。」と いった、ぬすびとは へへこの おなかを おさ
えながら また もと きた みちを かえって ゆきました。

底本 * 『新美南吉童話集 1 ごん狐〔新装版〕』

著者 * 新美南吉

出版社 * 大日本図書

出版年 * 二〇一二年十二月一日 第一刷発行

入力に使用 * 二〇一二年十二月一日 第一刷発行

入力 * 安城市図書館職員

花のき村と盗人たち

一

むかし、花のき村に、五人組みの盗人がやってきました。

それは、若竹が、あちこちの空に、かぼそく、ういういしい緑色の芽をのぼしている初夏の
ひるで、松林では松蟬が、ジイジイジイと鳴いていました。

盗人たちは、北から川にそってやってきました。花のき村の入口のあたりは、すかんぼやう
まごやしの子生えた緑の野原で、子どもや牛が遊んでおりました。これだけを見ても、この村が
平和な村であることが、盗人たちにはわかりました。そして、こんな村には、お金やいい着物
を持った家があるにちがいないと、もう喜んだのでありました。

川は藪の下を流れ、そこにかかっている一つの水車をゴトンゴトンとまわして、村の奥深く
はいつていきました。

藪のところまでくると、盗人のうちのかしらが、いいました。

「それでは、わしはこの藪のかげで待っているから、おまえらは、村のなかへはいつていつて
様子を見てこい。なにぶん、おまえらは盗人になったばかりだから、へまをしないように気を
つけるんだぞ。金のありそうな家をみたら、その家のどの窓がやぶれそうか、その家に犬
がいるかどうか、よつくしらべるのだぞ。いいか釜右工門。」

「へえ。」

と釜右工門が答えました。これは昨日まで旅あるきの釜師で、釜や茶釜をつくっていたのであ
りました。

「いいか、海老之丞。」

「へえ。」

と海老之丞が答えました。これは昨日まで錠前屋で、家々の倉や長持などの錠をつくっていた
のでありました。

「いいか角兵エ。」

「へえ。」

とまだ少年の角兵エが答えました。これは越後からきた角兵エ獅子で、昨日までは、家々の鬨
の外で、さか立ちしたり、とんぼかえりをうったりして、一文二文の銭をもらっていたのであ
りました。

「いいか鮑太郎。」

「へえ。」

と鮑太郎が答えました。これは、江戸からきた大工の息子で、昨日までは諸国のお寺や神社の門などのつくりをみてまわり、大工の修業していたのでありました。

「さあ、みんな、いけ。わしは親方だから、ここで一服すいながらまつている。」

そこで盗人の弟子たちが、釜右エ文は釜師のふりをし、海老之丞は錠前屋のふりをし、角兵エは獅子まいのように笛をヒヤラヒヤラ鳴らし、鮑太郎は大工のふりをして、花のき村にはいりこんでいきました。

かしらは弟子どもがいつてしまうと、どっかと川ばたの草の上に腰をおろし、弟子どもに話したとおり、たばこをスツパ、スツパとすいながら、盗人のような顔つきをしていました。これは、ずっとまえから火つけや盗人をしてきたほんとうの盗人でありました。

「わしも昨日までは、ひとりぼっちの盗人であったが、今日は、はじめて盗人の親方というものになってしまった。だが、親方になってみると、これはなかなかいいもんだわい。仕事は弟子どもがしてくてるから、こうしてねころんで待つておればいいわけである。」

とかしらは、することがないので、そんなつまらないひとりごとをいつてみたりしていました。やがて弟子の釜右エ門がもどつてきました。

「おかしら、おかしら。」

かしらは、びよこんとあざみの花のそばから体を起こしました。

「えいくそッ、びつくりした。おかしらなどとよぶんじゃねえ、魚の頭のように聞こえるじゃねえか。ただかしらといえ。」

盗人になりたての弟子は、

「まことにあいすみません。」

とあやまりました。

「どうだ、村の中の様子は。」

とかしらがききました。

「へえ、すばらしいですよ、かしら。ありました、ありました。」

「何が。」

「大きい家がありましたね、その飯炊釜は、まず三斗くらいはたける大釜でした。あれはえらい銭になります。それから、お寺につつてあつた鐘も、なかなか大きなもので、あれをつぶせば、まず茶釜が五十はできます。なあに、あつしの眼にくるいはありません。嘘だと思つたら、あつしがつくつてみせましょう。」

「ばかばかしいことにいばるのはやめろ。」

とかしらは弟子をしっかりとつけました。

「きさまは、まだ釜師根性がぬけんからだめだ。そんな飯炊釜やつり鐘などばかりみてくるや

つがあるか。それになんだ、その手に持っている、穴のあいた鍋は。」

「へえ、これは、その、ある家の前を通りますと、槇の木の生垣にこれがかけて干してありました。みるとこの、尻に穴があいていたのです。それをみたら、じぶんが盗人であることをついわすれてしまって、この鍋、二十文でなおしましょう、とそこのおかみさんにいつてしまったのです。」

「なんというまぬけだ。じぶんのしょうばいは盗人だということをしっかりと肚にいれておらんから、そんなことだ。」

と、かしらはかしららしく、弟子に教えました。そして、

「もういっぺん、村にもぐりこんで、しっかりとみなおしてこい。」

と命じました。釜右エ門は、穴のあいた鍋をぶらんぶらんとふりながら、また村にはいつていききました。

こんどは海老之丞がもどってきました。

「かしら、この村はこりやだめですね。」

と海老之丞は力なくいいました。

「どおして。」

「どの倉にも、錠らしい錠は、ついておりません。子どもでもねじけれそうな錠が、ついでおるだけです。あれじゃ、こっちのしょうばいにやなりません。」

「こっちのしょうばいというのはなんだ。」

「へえ、……錠前……屋。」

「きさまもまだ根性がかわっておらんツ。」

とかしらはどなりつけました。

「へえ、あいすみません。」

「そういう村こそ、こっちのしょうばいになるじゃないかツ。倉があつて、子どもでもねじけれそうな錠しかついておらんというほど、こっちのしょうばいに都合のよいことがあるか。まぬけめが。もういっぺん、みなおしてこい。」

「なるほどね。こういう村こそしょうばいになるのですね。」

と海老之丞は、感心しながら、また村にはいつていきました。

つぎにかえってきたのは、少年の角兵エでありました。角兵エは、笛をふきながらきたので、まだ藪の向こうで姿のみえないうちから、わかりました。

「いつまで、ヒヤラヒヤラと鳴らしておるのか。盗人はなるべく音を立てぬようにしておるものだ。」

とかしらはわかりました。角兵エはふくのをやめました。

「それで、きさまは何をみてきたのか。」

「川についてどんどんいきましたら、花菖蒲を庭いちめんにかかせた小さい家がありました。」

「うん、それから？」

「その家の軒下に、頭の毛も眉毛もあごひげもまっしろなじいさんがいました。」

「うん、そのじいさんが、小判のはいつた壺でも縁の下にかくしていそうな様子だったか。」

「そのおじいさんが竹笛をふいておりました。ちよつとした、つまらない竹笛だが、とてもええ

音がしておりました。あんな、ふしぎに美しい音ははじめてききました。おれがききとれていたら、じいさんはにこにこしながら、三つ長い曲をきかしてくれました。おれは、お礼に、とんぼがえりを七へん、つづげさまにやってみせました。」

「やれやれだ。それから？」

「おれが、その笛はいい笛だと思ったら、笛竹の生えている竹藪を教えてくださいました。その竹で作った笛だそうです。それで、おじいさんの教えてくれた竹藪へいつてみました。ほんとうにええ笛竹が、何百すじも、すいすいと生えておりました。」

「むかし、竹の中から、金の光がさしたという話があるが、どうだ、小判でもおちていたか。」

「それから、また川をどんどんくだつていくと小さい尼寺がありました。そこで花の撓がありました。お庭にいっぱい人がいて、おれの笛くらの大きさのお釈迦さまに、あま茶の湯をかけておりました。おれもいっぱいかけて、それからいっぱい飲ましてもらってきました。茶わんがあるならかしらにも持ってきてあげましたのに。」

「やれやれ、なんという罪のねえ盗人だ。そういう人ごみの中では、人のふところや袂に気をつけるものだ。とんまめが、もういっぺんきさまもやりなおしてこい。その笛はここへおいていけ。」

角兵衛はしかられて、笛を草の中へおき、また村にはいつていきました。

おしまいに帰ってきたのは鮑太郎でした。

「きさまも、ろくなものはみてこなかったろう。」

と、きかないさきから、かしらがいいました。

「いや、金持がありました、金持が。」

と鮑太郎は声をはずませていいました。金持ときいて、かしらはにこにこしました。

「おお、金持か。」

「金持です、金持です。すばらしいりっぱな家でした。」

「うむ。」

「その座敷の天井ときたら、さつま杉の一枚板なんで、こんなのをみたら、うちの親父はどん

なに喜ぶかも知れない、と思つて、あつしはみとれていました。」

「へつ、おもしろくもねえ。それで、その天井をはずしてでもくる気かい。」

鮑太郎は、じぶんが盗人の弟子であったことを思い出しました。盗人の弟子としては、あまり気がきかなかつたことがわかり、鮑太郎はバツのわるい顔をしてうつむいてしまいました。

そこで鮑太郎も、もういちどやりなおしに村にはいつていきました。

「やれやれだ。」

と、ひとりになったかしらは、草の中へあおむけにひっくりかえつていきました。

「盗人のかしらというのもあんがい楽なしょうばいではないて。」

二

とつぜん、

「ぬすとだッ。」

「ぬすとだッ。」

「そら、やつちまえッ。」

という、おおぜいの子どもの声がしました。子どもの声でも、こういうことを聞いては、盗人としてびっくりしないわけにはいかないので、かしらはひよこんととびあがりました。そして、川にとびこんで向こう岸へにげようか、藪の中にもぐりこんで、姿をくらまそうか、と、とつさのあいだに考えたのであります。

しかし子どもたちは、縄切や、おもちゃの十手をふりまわしながら、あちらへ走つていきました。子どもたちは盗人ごっこをしていたのでした。

「なんだ、子どもたちの遊びごとか。」

とかしらははりあいがぬけていきました。

「遊びごとにしても、盗人ごっこはよくない遊びだ。いまどきの子どもはろくなことをしなくなつた。あれじゃ、さきが思いやられる。」

じぶんが盗人のくせに、かしらはそんなひとりごとをいいながら、また草の中にねころがるうとしたのであります。そのときうしろから、

「おじさん。」

と声をかけられました。ふりかえつてみると、七歳ぐらいの、かわいらしい男の子が牛の仔をつれて立っていました。顔だちの品のいいところや、手足の白いところをみると、百姓の子どもとは思われません。旦那衆の坊ちゃんが、下男について野あそびにきて、下男にせがんで仔牛を持たせてもらったのかもしれない。だがおかしいのは、遠くへでもいく人のように、白

い小さい足に、小さい草鞋をはいていることでした。

「この牛、持っていったね。」

かしらが何もいわないさきに、子どもはそういって、ついとそばにきて、赤い手綱をかしらの手にあずけました。

かしらはそこで、何かいおうとして口をもぐもぐやりましたが、まだいい出さないうちに子どもは、あちらの子どもたちのあとを追って走ってしまいました。あの子どもたちの仲間になるために、この草鞋をはいた子どもはあとをもみずについてしまいました。

ぼけんとしているあいだに牛の仔を持たされてしまったかしらは、くっくつと笑いながら牛の仔をみました。

たいてい牛の仔というものは、そこらをぴよんぴよんはねまわって、持っているのがやっかいなものです。この牛の仔はまたたいそうおとなしく、ぬれたうるんだ大きな眼をしばたたきながら、かしらのそばに無心に立っているのです。

「くっくつくつ。」

とかしらは、笑いが腹の中からこみあげてくるのが、とまりませんでした。

「これで弟子たちに自慢ができる。きさまたちがばかづらさげて、村の中をあるいているあいだに、わしはもう牛の仔をいっぴきぬすんだ、といっ。」

そしてまた、くっくつくつと笑いしました。あんまり笑ったので、こんどは涙が出てきました。「ああ、おかし。あんまり笑ったんで涙が出てきやがった。」

ところが、その涙が、流れて流れてとまらないのでありました。

「いや、はや、これはどうしたことだい、わしが涙を流すなんて、これじゃ、まるでないているのと同じじゃないか。」

そうです。ほんとうに、盗人のかしらはないたのであります。——かしらは嬉しかったのです。じぶんはいままで、人から冷たい眼でばかりみられてきました。じぶんが通ると、人びとはそら変なやつがきたといわんばかりに、窓をしめたり、すだれをおろしたりしました。じぶんが声をかけると、笑いながら話しあっていた人たちも、きゆうに仕事のことを思い出したように向こうをむいてしまふのであります。池の面にうかんでいる鯉でさえも、じぶんが岸に立つと、がぼつと体をひるがえしてしずんでいくのであります。あるときさるまわしの背中に負われているさるに、柿の実をくれてやったら、一口もたべずに地べたにすててしまいました。みんながじぶんをきらっていたのです。みんながじぶんを信用してはくれなかったのです。ところが、この草鞋をはいた子どもは、盗人であるじぶんに牛の仔をあずけてくれました。じぶんをいい人間であると思ってくれたのです。またこの仔牛も、じぶんをちつともいやがらず、おとなしくしております。じぶんが母牛でもあるかのように、そばにすりよって

います。子ども仔牛も、じぶんを信用しているのです。こんなことは、盗人のじぶんには、はじめてのことでもあります。

人に信用されるというのは、なんとといううれしいことではありません。……

そこで、かしらはいま、美しい心になっているのであります。子どもころにはそういう心になったことがありませんが、あれから長いあいだ、わるいきたない心でずっといたのです。久しぶりでかしらは美しい心になりました。これはちようど、あかまみれのきたない着物を、きゆうに晴着にきせかえられたように、奇妙なぐあいでありました。

——かしらの眼から涙が流れてとまらないのはそういうわけなのでした。

やがて夕方になりました。松蟬は鳴きやみました。村からは白い夕もやがひっそりと流れだして、野の上にひろがっていききました。子どもたちは遠くへいき、「もういいかい」「まあだだよ」という声が、ほかのもの音とまじりあって、ききわけにくくなりました。

かしらは、もうあの子どもが帰ってくるじぶんだと思って待っていました。あの子どもがきたら、「おいしよ。」と、盗人と思われぬよう、こころよく仔牛をかえしてやろう、と考えていました。

だが、子どもたちの声は、村の中へ消えていってしまいました。草鞋の子どもは帰ってきましたでした。村の上にかかっていた月が、かがみ職人のみがいばかりの鏡のように、ひかりはじめました。あちらの森でふくろうが、二声ずつくぎって鳴きはじめました。

仔牛はお腹がすいてきたのか、からだをかしらにすすりよせました。

「だって、しようがねえよ。わしからは乳は出ねえよ。」

そういつてかしらは、仔牛のぶちの背中をなでていました。まだ眼から涙が出ていました。そこへ四人の弟子がいつしよに帰ってきました。

三

「かしら、ただいまもどりました。おや、この仔牛はどうしたのですか。ははア、やっぱりかしらはただの盗人じゃない。おれたちが村をさぐりにいつていたあいだに、もうひと仕事しちやったのだね。」

釜右エ門が仔牛をみていいました。かしらは涙にぬれた顔をみられまいとして横をむいたまま、「うむ、そういつてきさまたちに自慢しようと思つていたんだが、じつはそうじゃねえのだ。これにはわけがあるのだ。」

といいました。

「おや、かしら、涙……じゃございせんか。」

と海老之丞が声を落としてきました。

「この、涙でものは、出はじめると出るもんだな。」

といって、かしらは袖で眼をこすりました。

「かしら、喜んでくだせえ、こんどこそは、おれたち四人、しっかり盗人根性になってさぐつてまいりました。釜右工門は金の茶釜のある家を五軒みとどけますし、海老之丞は、五つの土蔵の錠をよくしらべて、曲がった釘一本であけられることをたしかめますし、大工のあつしは、この鋸でなんなく切れる家尻を五つみてきましたし、角兵工は角兵工でまた、足駄ばきでとびこえられる堀を五つみてきました。かしら、おれたちはほめていただきとうございます。」

と鮑太郎が意気こんでいました。しかしかしらは、それに答えないで、
「わしはこの仔牛をあずけられたのだ。ところが、いまだに、とりにこないのよわわっているところだ。すまねえが、おまねら、手わけして、あずけていった子どもをさがしてくれねえか。」

「かしら、あずかった仔牛をかえすのですか。」

と釜右工門が、のみこめないような顔でいました。

「そうだ。」

「盗人でもそんなことをするのでござえますか。」

「それにはわけがあるのだ。これだけはかえすのだ。」

「かしら、もつとしつかり盗人根性になってくだせえよ。」

と鮑太郎がいました。

かしらは苦笑いしながら、弟子たちにわけをこまかく話してきかせました。わけをきいてみれば、みんなにはかしらの心持ちがよくわかりました。

そこで弟子たちは、こんどは子どもをさがしに行くことになりました。

「草鞋をはいた、かわいらしい、七つぐれえの男坊主なんですね。」

とねんをおして、四人の弟子はちっていきました。かしらも、もうじつとしておれなくて、仔牛をひきながら、さがしにいきました。

月のあかりに、野茨とうつぎの白い花がほのかにみえている村の夜を、五人のおとなの盗人が、一ぴきの仔牛をひきながら、子どもをさがして歩いていくのでありました。

かくれんぼのつづきで、まだあの子どもがどこかにかくれているかもしれないというので、盗人たちは、みみずの鳴いている辻堂の縁の下や柿の木のうや、物置の中や、いいにおいのするみかんの木のかげをさがしてみたのです。人にきいてもみたのです。

しかし、ついにあの子どもはみあたりませんでした。百姓たちはちょうちんに火を入れてきて、仔牛をてらしてみたのですが、こんな仔牛はこのあたりではみたことがないというので

した。

「かしら、こりや夜つびてさがしてもむだらしい、もうよみましょう。」

と海老之丞えびのじょうがくたびれたように、道ばたの石に腰こしをおろしていいました。

「いや、どうしてもさがし出して、あの子どもにかえしたいのだ。」

とかしらはききませんでした。

「もう、てだてがありませんよ。ただひとつのこっているてだては、村役人のところへうったえることだが、かしらもまさかあそこへはいきたくないでしょう。」

と釜右エ門かま えもんがいました。村役人というのは、いまでいえば駐在巡査ちゆうざいじゆんさのようなものであります。

「うむ、そうか。」

とかしらは考えこみました。そしてしばらく仔牛こうしの頭をなでていましたが、やがて、

「じゃ、そこへいこう。」

といいました。そしてもう歩きだしました。弟子でしたちはびっくりしましたが、ついていくよりしかたがりませんでした。

たずねて村役人の家へいくと、あらわれたのは、鼻の先に落ちかかるように眼鏡めがねをかけた老人でしたので、盗人ぬすびとたちはまず安心しました。これなら、いざというときに、つきとばしてにげてしまえばいいと思ったからであります。

かしらが、子どものことを話して、

「わしら、その子どもを見失って困っております。」

といいました。

老人は五人の顔をみまわして、

「いっこう、このあたりでみうけぬ人ばかりだが、どちらからまいった。」

とききました。

「わしら、江戸から西の方へいくものです。」

「まさか盗人ぬすびとではあるまいの。」

「いや、とんでもない。わしらはみな旅の職人しよくたんです。釜師かましや大工や錠前屋じようまえやなどです。」とかしらはあわてていいました。

「うむ、いや、変なことをいってすまなかつた。お前たちは盗人ではない。盗人が物をかえすわけがないので。盗人なら、物をあずかれば、これさいわいとくすねていってしまうはずだ。いや、せつかくよい心で、そうしてとどけにきたのを、変なことを申してすまなかつた。いや、わしは役目がら、人を疑うたがうくせになっているのじゃ。人をみさえすれば、こいつ、かたりじゃないか、すりじゃないかと思うようなわけさ。ま、わるく思わないでくれ。」

と老人はいいわけをしてあやまりました。そして、仔牛こうしはあずかっておくことにして、下男に

物置の方へつれていかせました。

「旅で、みなさんおつかれじやろ、わしはいまいい酒をひとびん西の館の太郎どんからもらったので、月をみながら縁側でやろうとしていたのじゃ。いいとこへみなさんこられた。ひとつきあいなされ。」

ひとのよい老人はそういつて、五人の盗人を縁側につれていきました。

そこで酒をのみはじめましたが、五人の盗人とひとりの村役人はすっかり、くつろいで、十年もまえからの知りあいのように、ゆかいに笑ったり話したりしたのであります。

するとまた、盗人のかしらはじぶんの眼が涙をこぼしていることに気がつきました。それを見た老人の役人は、

「おまえさんはなき上戸とみえる。わしは笑い上戸で、ないている人を見るとよけい笑えてくる。

どうかわるく思わんでくだされや、笑うから。」

といつて、口をあけて笑うのでした。

「いや、この、涙というやつは、まことにとめどなく出るものだね。」

とかしらは、眼をしばたきながらいました。

それから五人の盗人は、お札をいつて村役人の家を出ました。

門を出て、柿の木のそばまでくると、何かを思い出したように、かしらが立ちどまりました。

「かしら、何かわすれものでもしましたか。」

と鮑太郎がききました。

「うむ、わすれもんがある。おまえらも、いっしょにもういっぺんこい。」

といつて、かしらは弟子をつれて、また役人の家にはいつていきました。

「ご老人。」

とかしらは縁側に手をついていました。

「なんだね、しんみりと。なき上戸のおくの手が出るかな。ははは。」

と老人は笑いました。

「わしらはじつは盗人です。わしがかしらでこれらは弟子です。」

それをきくと老人は眼をまるくしました。

「いや、びっくりなさるのはごもつともです。わしはこんなことを白状するつもりじゃありませんでした。しかしご老人が心のよいお方で、わしらをまつとうな人間のように信じていてくださるのを見ては、わしはもうご老人をあざむいていることができなくなりました。」

そういつて盗人のかしらはいままでしてきたわるいことをみな白状してしまいました。そしておしまいに、

「だが、これらは、昨日わしの弟子になったばかりで、まだ何もわるいことはしておりません。お慈悲で、どうぞ、これらだけはゆるしてやってください。」
といました。

つぎの朝、花のき村から、釜師と錠前屋と大工と角兵エ獅子とが、それぞれべつの方へ出ていきました。四人はうつむきがちに、歩いていきました。かれらはかしらのことを考えていました。

よいかしらであったと思っておりました。よいかしらだから、最後にかしらが「盗人にはもうけっしてなるな。」といったことばを、守らなければならないと思っておりました。

角兵エは川のふちの草の中から笛をひろってヒヤラヒヤラと鳴らして行きました。

四

こうして五人の盗人は、改心したのですが、そのもとなつたあの子どもはいつたいだれだつたのでしょうか。花のき村の人びとは、村を盗人の難からすくってくれた、その子どもをさがしてみたのですが、けっきよくわからなくて、ついには、こういうことにきました、――

それは、土橋のたもとにむかしからある小さい地藏さんだろう。草鞋をはいていたというのがしようこである。なぜなら、どういうわけか、この地藏さんには村人たちがよく草鞋をあげるので、ちようどその日も新しい小さい草鞋が地藏さんの足もとにあげられてあつたのである。

――
といたのでした。

地藏さんが草鞋をはいて歩いたというのはふしぎなことですが、世の中にはこれくらいのおふしぎはあつてもよいと思われます。それに、これはもうむかしのことなのですから、どうだつて、いいわけです。でもこれももしほんとうだつたとすれば、花のき村の人びとがみな心のよい人びとだつたので、地藏さんが盗人からすくってくれたのです。そうならば、また、村というものは、心のよい人びとが住まねばならぬということにもなるであります。

出版社*大日本図書

出版年*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用*1996年9月1日第10刷発行

入力*安城市中央図書館職員

ひとつの火

わたしが子どもだったじぶん、わたしの家は、山のふもとの小さな村にありました。わたしの家では、ちようちんやろうそくを売っておりました。

ある晩ばんのこと、ひとりのうしかいが、わたしの家でちようちんとろうそくを買いました。

「ぼうや、すまないが、ろうそくに火をともしてくれ。」

と、うしかいがわたしにいいました。

わたしはまだマッチをすったことがありませんでした。

そこで、おっかなびつくり、マッチの棒ぼうのはしの方をもつてすりました。すると、棒のさきに青い火がともりました。

わたしはその火をろうそくにうつしてやりました。

「や、ありがとう。」

といって、うしかいは、火のともったちようちんを牛のよこはらのところにつるして、いつてしまいました。

わたしはひとりになってから考えました。

——わたしのともしてやった火はどこまでゆくだろう。

あのうしかいは山の向こうの人だから、あの火も山をこえてゆくだろう。

山の中で、あのうしかいは、べつの村にゆくもうひとりの旅人にゆきあうかもしれない。

するとその旅人は、

「すみませんが、その火をちょっとかしてください。」

といって、うしかいの火をかりて、じぶんのちようちんにうつすだろう。

そしてこの旅人は、よっぴて山道さんだうをあるいてゆくだろう。

すると、この旅人は、たいこやかねをもったおおぜいのひとびとにあうかもしれない。

その人たちは、

「わたしたちの村のひとりの子どもが、狐きつねにばかされて村にかえってきません。それでわたしたちはさがしているのです。すみませんが、ちょっとちようちんの火をかしてください。」

といって、旅人から火をかり、みんなのちようちんにつけるだろう。長いちようちんやまるいちようちんにつけるだろう。

そしてこの人たちは、かねやたいこをならして、やまや谷をさがしてゆくだろう。

わたしはいまでも、あのとき わたしがうしかいのちようちゃんにともしてやった火が、つきからつきへうつされて、どこかにもっているのではないか、とおもいます。

底本*「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者*新美南吉

出版社*大日本図書

出版年*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用*1999年3月25日第11刷発行

入力*安城市中央図書館職員

ひよりげた

あめが はれました。ジョウフクインの うらの やぶの なかに、やぶつかが わんわん なきました。月が できると ぬれた たけの はが ひかりました。

ジョウフクインの うらの やぶの なかに たぬきが すんで いました。この あいだ うまれて まだ おちちに ばっかり くつついて いる こどもの たぬきと いっしょに、えにしだの 木の ねもとの あなの なかに すんで いました。

おかあさんだぬきは こんや こどもの たぬきに、ばける ことを おしえようと おもって、あなの そとへ でて きました。えにしだの はなが、さっきの あめで おとされて そのへんに ちらかって いるのが、月あかりで みえました。

「さあ ぼうや、もう おちちからはなれなさいよ。」

こどもの たぬきは それでも おちちを すって いました。

「さあ さあ。」

おかあさんが、こどもの たぬきの おなかに 手を かけて、はなさせようと しても、こどもの たぬきの 口は おちちに ついて いました。

「いいかい ぼうや。」

「なあに。」

「ぼうや、なにに ばけたい。」

「お月さんに ばけたいの。そして おそらから みて いたいの。」

「ぼうや、おばかさんね。お月さんなんかには ばけられませんよ。」

ぼうやの たぬきは こまったような かおを しました。

「いや いや、お月さんで なけりや、いや。」

おかあさんだぬきは ぼうやの たぬきを だきあげて、

「こわいんだよ お月さんは。お月さんに ばけたり するとね、ほんとうの お月さんが おこって ばちを あてるのよ。それではね、かあちゃんが いま おもしろい ものに ばけて あげるから まって おいでよ。」

おかあさんだぬきは、こどもの たぬきを したに、おろしました。

「さあ ぼうや。おめめを つむって いなさいよ。かあちゃんが もう いいよって いうまで。」

ぼうやの たぬきは、いわれた とおり、目を とじたけれど、りょう手で しっかり かあちゃんの 手を とらまえて いました。

「ぼうや、だめよ。かあちゃんの 手をはなさなくっては。」

「だって、かあちゃん いなく なるもの。」

「かあちゃん どこへも いかないから だいじょうぶだよ。そして、すぐに ばけて みせるから。」

「でも——」

「さあ、もう いっぺん おめめを とじて、ぼうや、とお かぞえなさい。とお かぞえたら 目を あけても いいよ。」

おかあさんだぬきは、ぼうやが とお かぞえられないのを、ちゃんと しつて いました。けれど ぼうやが ○目を とじたまま、がってん がってんを したので すばやく ばけようと しました。

「ひとつ、ふたつ、みつつ、ななつ、とお。」

ぼうやの たぬきは、もう 目を あいて しまいました。おかあさんだぬきは、まだ すっかり ばけて いないから、あわてて しまいました。あたまが はげて、 くらい ころもを きてる ところは ジョウフクインの おしろうさん そっくり でしたが、まだ 口には ぴんぴんと ひげが はえてたし、ふとい しつぽも だらりと たれて いました。

「あら、ぼうや、まだ だめよ。」

おかあさんだぬきは、あわてて しつぽを ころもの なかへ かくしました。それでも おひげの ぴんぴん はえて いるのには きが つきませんでした。ぼうやの たぬきは あっけに とられて しまいました。いままで そこには おかあさんが いたのに、目を あいて みると、みも しらぬ ぼうさんが いたからです。

ぼうやの たぬきは かなしく なって、

「かあちゃん。」

と いました。

どこか そのへんの 木の かげに、

「ぼうや ここだよ。」

と、かあさんの やさしい こえが するかと おもいました。けれど、どこからも おかあさんは でて こなくって 目の まえの しらない ひとが、

「なあに、ぼうや。」

と いました。おかあさんの こえです。ぼうやは 目を ぱちぱち させて、その ぼうさんの かおを みつめました。

「かあちゃん。」

と もう いっぺん よんで みました。

「なあにしたら、ぼうや。ふふふ、ぼうや、ばかされちゃったのね。かあちゃんですよ。」

かあさんだぬきが、ぼうやを だきあげると、

「こんな かあちゃん いやだ。ほんとの かあちゃんが いいや。」

と すねました。

「こわいの。」

「うん。」

「こわかないよ、おかあちゃんだから。ぼうやも いまに、こんな ふうになるように なるんだよ。」

「ぼうやには できないもの。」

「だからさ、いま かあちゃんが おしえて あげるのよ。」

かあさんだぬきは、ぼうやを おろして、もとの すがたに なりました。そして、ぼうさんに ぼける ことを いっしょうけんめいに おしえました。けれど ぼうやの たぬきは だめでした。あたまだけ じょうずに こぞうに ぼけたかともうと、くろい 手が 二ほん によきつと でて いました。くろい 手を しろい 手に みせるように おそわった ころには、ころもの したに かくして いた ちいさい しっぽが だらりと たれさがって いました。しっぽが ころもの したに まきこまれた ころには みみが 一つの まにか、けの はえた たぬきの みみに なって いました。おかあさんだぬきは こまって しまいました。

「だめよ ぼうや、もつと よく おぼえなくては。」

すると ぼうやは、ちいさな あくびを して、

「かあちゃん もう ねむい。」

と いいました。

底本 *『新美南吉童話集 1 ごん狐〔新装版〕』

著者 *新美南吉

出版社*大日本図書

出版年*二〇一二年十二月一日 第一刷発行

入力に使用*二〇一二年十二月一日 第一刷発行
入力 *安城市図書館職員

ひろった らっぱ

まずしい おとこの ひとが ありました。まだ わかいのに おとうさんも おかあさんも きょうだいも なく、ほんとうに ひとりぼっちで ありました。

この おとこの ひとは、なにか ひとの びっくりするような ことを して えらく なりたいたと かんがえて おりました。

すると ちようど その ころ、にしの ほうで せんそうが おこって おりました。

それを きいた この まずしい おとこの ひとは、

「よし、それでは じぶんも せんそうの ある ところへ 行って、りっぱな てがらを たて たいしょうに なろう」

と ひとりごとを いいました。

そこで この ひとは にしの ほうに むけて しゅっぱいたしました。なにしろ おかねが ありませんので、きしやや じどうしやに のる ことは できません。むらから むらへ こじきを しながら、にほんの あしで てくてく ある いて いったので ありました。

「せんそうは どちらですか、せんそうは」

と いく さきさきで たずねながら この ひとは ひとつきも ふたつきも たびを しました。

すると だんだん せんそうの ある ところに ちかづいて きたらしく、ときどき とおくの ほうから かすかに たいほうの とどろきが きこえて きましました。

「おお たいほうの おとが きこえる。なんと いう いさましい おとだろう」
おとこの ひとは むねを おどらせながら あしを はやめて いきました。

そして よるに なってから ねしずまった ひとつの むらに つきました。たいへん しずかな むらで いぬの なきこえも きこえず いえいえの まどは みな かたく とざされ、がいとうには ひが ともって いませんでした。おとこは お花ばたけの そばの ある くさやねの こやに はいって ぐっすり ねむりました。

じぶんが りっぱな たいしょうに なって、むねに ずらりと くんしょうを ならべ、ぴかぴか ひかる けんを もって、うまの 上に そりかえって いる ゆめを みて いると、やがて よが あけて あさに なりました。

おとこが めを さまして みると、これは また どうした ことでしょうか、め
の まえの お花ばたけが むちやくちやに ふみにじられて あります。

「はて、こんな うつくしい 花ばたを だれが あらしたのだろう」

と おとこが たおされた いっぱんの けしの 花を おこして やろうと する
と、その ねもとに しんちゅうの らっぱが ひとつ おちて おりました。

おとこは らっぱを みると 花を おこして やる ことも わすれて、

「ああ、これだ。これさえ あれば じぶんは てがらを たてる ことができる。
じぶんは らっぱしゆに なろう」

と たいへん よろこびました。

ところで、その むらは あさに なっても だれも おもてに でて くる も
のは なく、まどさえ あけないので ありました。けれど おとこは うちょうて
んに なって いましたので そんな ことは きにも かけないで、いさましく
らっぱを ふきならしながら また あるいて いきました。

おとこは、ちようど おながが すいて きた ころ また ひとつの むらに
はいりました。

その むらにも ひと は あまり いませんでした、まだ すこしは のこつ
て おりました。

そこで おとこは ある いえの まどしたに たって、

「おながが すいて しようが ありません。なにか たべさせて ください」
と たのみました。

いえの なかには ふたりの としよりが いて ちようど ひとつの ばんを
ふたつに きろうと して いる ところでしたが、はらの すいた おとこを き
のどくに おもって ばんを みつちに きり、 その ひとぎれを おとこに めぐ
んで やりました。

「あなたは これから どちらへ いくのですか」

と しんせつな としよりは わかい おとこに たずねました。

「これから せんそうに いくのです。わたしは らっぱしゆに なって りっぱ
に はたらきます」

と わかい おとこは こたえて、としよりたちの まえで いさましい らっぱ
を ふいて きかせました。

「とて とて とて と

みな みな あつまれ

けんを もて、

とて とて とて と

てっぼう かつげ

はたを もて、

とて とて とて と

それ それ いそげ

せんそうへ、

とて とて とて と

とて とて とて と

と おとこは ふきました。

きいて いた としよりは ふかい ためいきを ついて、

「せんそうは もう たくさんです。せんそうの ために わたくしたちは はたけを あらされ、たべる ものは なくなって しまいました。わたしたちは これから どう したら よいでしょう」と

と いいました。

おとこは としよりと わかれて なおも あるいて いきますと、なるほど あの としよりが いったとおり、はたけは たいほうの わや うまの あしです っかり あらされて ありました。

どの むらにも あまり ひとはいないので、のこって いる ひとびとは みな あおい やつれた かおを して おりました。

おとこは この ひとびとが きのどくに なりました。そこで、もう せんそうに いくのは やめに しました。

「そうだ、この きのどくな ひとびとを たすけて やらねば ならない」

おとこは あちら こちらの むらに のこって いる ひとびとを ひとところに あつめました。

「みなさん、げんきを ださない。げんきを だして、ふみあらされた はたけを たがやし、むぎの たねを まきましよう」

と おとこは ひとびとに いいました。

ひとびとは げんきを だして はたけで はたらき はじめました。

あさ いちばん はやく おきるのは あの おとこで ありました。まだ ひの
でない うちから おとこは はたけの まんなかの おかの 上に のぼって、ら
っぱを ふくので ありました。

「とて とて とて と

みな みな おきろ

もう あさだ、

とて とて とて と

くわをば もって

はたに しろ、

とて とて とて と

たねをば まけよ

むぎの たね

とて とて とて と

とて とて とて と

と おとこは ふいたので あります。

すると ひとびとは うまや うしと いっしょに はたけに でて きて せつ

せと はたらきました。

やがて まいた たねから めが でて のはら いちめんに むぎの みゆる

ときが やって きたので あります。

底本*「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者*新美南吉

出版社*大日本図書

出版年*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用*1999年3月25日第11刷発行

入力*安城市中央図書館職員

みちこさん

みちこさんが、ことりやの まえまで くと、しらない おばさんが、うばぐるまの なかの にもつを なおして いました。あかちゃんが のつて いて、かきまわしたのでした。あかちゃんは、ぶうぶう いいながら、かあちゃんの じゃまして いました。

みちこさんは、おばさんの そばに よって、

「あかちゃん だいてて あげましょうか。」と いいました。

「ええ ありがとう、でも おいたぼうで、とつても おもいのよ。」

「いいわ おばさん。」

「すみませんね。」

おばさんは あかちゃんを みちこさんに だっこさせて くれました。みちこさんの うでに、おちちくさい、しろい パジャマの かわいらしい あかちゃんが、だかれました。

みちこさんは、

「ちゅちゅちゅつ、ほらほら。」と ことりを みせて やりました。

けれど、あかちゃんは、ことりを みないで、みちこさんの かおを みて いて にっこり わらいました。それから、おてで みちこさんの ねくたいを つかみました。みちこさんは、かわいい てだなと おもいました。

その うちに おばさんは すつかり うばぐるまの なかを かたづけ、

「すみませんでした、ほんとうに。」と いいました。あかちゃんは また うばぐるまに のつけられて、いって しまいました。

みちこさんは、まだ あかちゃんを だっこしてるような てつきを して おうちへ かえって きました。

おかあさんは みちこさんを みると、

「なにを そんな おかしな てつき してるの。」と、ふしぎそうな かおを しました。

「わたしね、どこかの かわいい あかちゃんを だっこしたのよ。わたしの かおを みて わらったわ。」

「ふーん。」

「あんまり、かわいかったので、まだ だっこしてる つもりで かえって きたのよ。おかあさん、ほら おちちの においが してるわ。」と いって みちこさんはむねの あたりをかきました。おかあさんは、みちこさんは いい こだなと おもいました。

底本*「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者*新美南吉

出版社*大日本図書

出版年*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用*1996年9月1日第10刷発行

入力*安城市中央図書館職員